
■ JXホールディングス(5020) 2010年度第4四半期決算 アナリスト説明会 Q&A

1. 日 時 : 5月12日(木)15:30-17:00
 2. 出席者数 : 198名
 3. 主な質疑内容:
-

－ 本資料には、将来見通しに関する記述が含まれています。巻末に注意事項を記載しています。－

Q. 今回の震災影響について、仙台、鹿島の両製油所が被害を受け、現在停止している状態だが、可能な範囲で復旧の見通しをお教えいただきたい。

A. 仙台については既に仮設の出荷ラインを整備し、通常ベースの半分程度の出荷を行っている。生産再開は来年の夏という予定だが、極力前倒しすべく取り組んでいる。鹿島については大型船用のローディングアーム(L/A)が損傷し、原油の受入が厳しい状況だが10万ton程度の中型船の着積は可能であり、6月中には生産を開始したい。ただし、L/Aの更新には半年程度かかると見ており、それまでは100%稼働とならない。なお、出荷については既に開始している。

Q. 石油精製のマージンについて、足元の4月、5月の状況と、今回の前提の位置関係を教えていただきたい。これと合わせて需給を適正な状態へ持っていく上で、仙台、鹿島が被災している中で輸出等をどのように考えているかをお聞きしたい。

A. 震災後、スポット市場の指標価格が実体を反映していないとの判断に加え、被災地の状況も勘案し、当社は卸価格を一時的に据え置いた。その中でも4月のマージンは比較的高い水準にあった。その後、震災影響による需要減が顕在化してきたため、5月に入ってから当社の前提並みになっている。11年度のマージン前提は中計並みとしており、これは前年平均に対し1円強低いレベルである。足元の数量の落ち込みが度の程度続くか、見極めが着いていない状況の中で、今のマージン前提が妥当性を欠いているとは思わない。輸出については4月分を全てキャンセルをし、国内向けに当てていたが、足元の内需が弱いことに加え、中間留分シンガポール市況は\$20近いスプレッドを維持しており、今後再開していきたい。

Q. 中計の統合シナジーに関して、今回震災の被害を受けたことでその実行について時間がかかるのか、目標達成が難しくなるのではと考えていた。しかし説明では、特別損失は計上したもののシナジーの目標に変更はないとのことだった。どのような計画になっているのかを確認させていただくと共に、変わらずシナジーを生み出せる背景についてお教えいただきたい。

A. 統合シナジーについては2年目の11年度累計で3年間全体の63%と順調にきていると考えている。3年間で1,090億円の目標については、きちんとつめ切れていない部分が若干あるものの、一方では関係会社の合理化等、これまで含まれていなかった項目もあり、これを並行的にやっていく。今は持株会社に並ぶ機能子会社の統合を順次行っており、これが一段落したら、中核事業会社の関係会社についても考えてみたいと思っている。こういった入り繰りはあるが1,090億円の合計としては心配していない。確かに仙台や鹿島で効率化を考えていた部分については、製油所の被災によって難しくなっているものもあるが、全体としては順調であり、積み上げら

れる自信はある。

Q. 石油開発で最近探鉱の成功事例が出てきたという点について、もう少し教えてほしい。

A. 2011年1月にベトナム沖でガス・コンデンセートを確認しており、これについては更に追加井を掘っていくこととなる。2011年2月にはアブダビ石油がアラブ首長国連邦で生産中の3油田の権益に加え、既発見・未開発のヘイル油田の権益を含む利権契約を締結し、この開発も手がけていくこととなった。いずれ中東はコア地域の一翼を担っていくことになることを期待している。メキシコ湾のデイビージョーンズについては、超深部にあるガス田であり、今回広がりを確認できている。2011年3月には英国北海のカリーン構造の広がりを確認した。当社の権益は17%程度だが、テスト装置での生産テストを行ったところ、機器の上限に張り付いている状況であり、埋蔵量等については当社にとっては大きなものと期待している。2011年4月のオーストラリアについてはガスの発見だが、液化せずそのまま販売するルートをパートナーが有しているため、高採算になるのではないかと期待している。最後に2011年5月のカタールについては直近の新規取得鉱区であり、今のところ当社単独の保有となっている。世界最大のノースフィールドガス田の地下であり、大型の探鉱案件として期待したい。中計において探鉱中心の方針をとっているが、ご報告のように徐々に成果が出始めている。

Q. 金属事業において、現在の銅の需給バランスはどうなっているか。銅価についての御社の見方を教えていただきたい。また、カセロネスの利益貢献規模は2013年以降ではどのようなイメージか。

A. 銅の2010年度の世界的需要バランスは20万~30万tonの不足であった。これが2011年に50万ton前後の不足に拡大するだろうといわれている。したがって、銅価も上下はするものの、基調としては高水準で推移するのではないかと見ている。また、カセロネスの利益貢献については銅価が足元のレベルで行くと当社の連結経常利益が数百億円増えることになるだろうという見方だ。これがフルで効いてくるのは2014年度からとなる。

Q. フリーキャッシュフローについて、3年間で300億円と見込まれているが、上ぶれることもあるのか。

A. 300億円という額は、売上の規模からいえばほぼゼロに近い状態だ。これをもっと増やしていきたいというのが目標の一つだ。中期経営計画においては、1,800億円のフリーキャッシュフローを見ていたが、それとの比較では1,500億円ほど圧縮されている。これに対しては利益の拡大、震災関連キャッシュアウトの圧縮、定常投資の圧縮、資産売却といったところで何とか積み上げていきたい。

以上

本資料には、将来見通しに関する記述が含まれていますが、実際の結果は、様々な要因により、これらの記述と大きく異なる可能性があります。かかる要因としては、

(1) マクロ経済の状況またはエネルギー・資源・素材業界における競争環境の変化

(2) 法律の改正や規制の強化、

(3) 訴訟等のリスク など

が含まれますが、これらに限定されるものではありません。